

レクチャーシリーズ：批評と芸術

第2回「行為と行為者」2024年2月10日（土）14:00～17:30

実施レポート

文=山本浩貴 | 撮影=稲口俊太

2024年2月10日、同年同月3日に開催された初回に続き、文化庁アートクリティック事業の若手批評家によるレクチャーシリーズの第2回目が開催された。今回は「行為と行為者」と題され、登壇者は大岩雄典、関貴尚、高橋沙也葉（登壇順）の各氏。当日は、3名のレクチャーによるプレゼンテーションとディスカッションが行われた。

大岩雄典氏は、美術家としてインスタレーションを中心に作品を発表する一方、研究者としてマイケル・フリードらの精読を通して芸術の「インスタレーション」形式を批評的に探究している。大岩氏は自身のプレゼンテーションを「行為と行為者と行為者性のための装置」と題し、前回のレクチャーシリーズとの関連性を整理した後、その大枠における目的——（「行為」という観点から）芸術制作や美術批評における有限と無限の境界を画定すること——を明確化した。



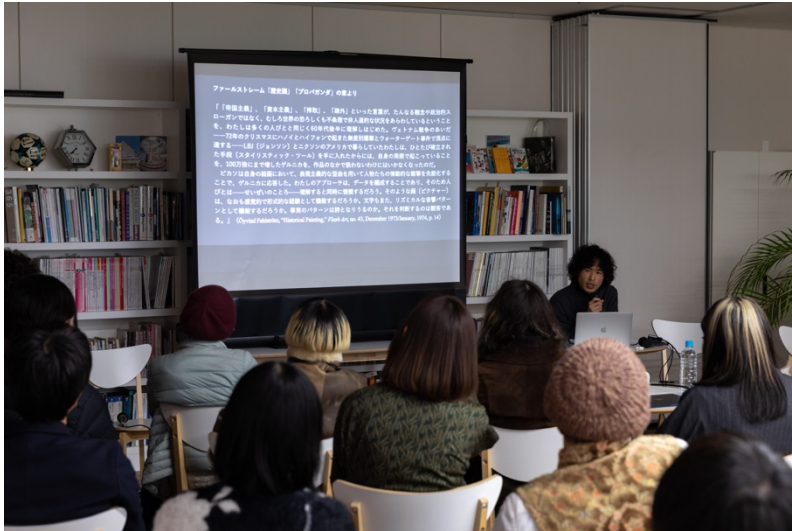
自らの博士論文でも分析対象となっているフリードの「演劇性」概念、あるいはアメリカ発のモダニズム美術批評を牽引したハロルド・ローゼンバーグの「アクション・ペインティング」をめぐる議論などが丁寧に検討された。その帰結として大岩氏は、自己の行為を表象しその行為者性を前景化する装置としての芸術、とりわけインスタレーションの位置付けを示し、その可能性に言及した。



関貴尚氏は美術史を専門とし、T・J・クラークなどの議論を参照しながら、近現代の芸術実践について幅広く論じてきた。「世界を操作するーオイヴィント・ファールストレームにおける政治実践」と題されたプレゼンテーションは、しばしば「ポップ・アート」の文脈で語られてきたファールストレームの作品を拡張的に再読することを目的とする。



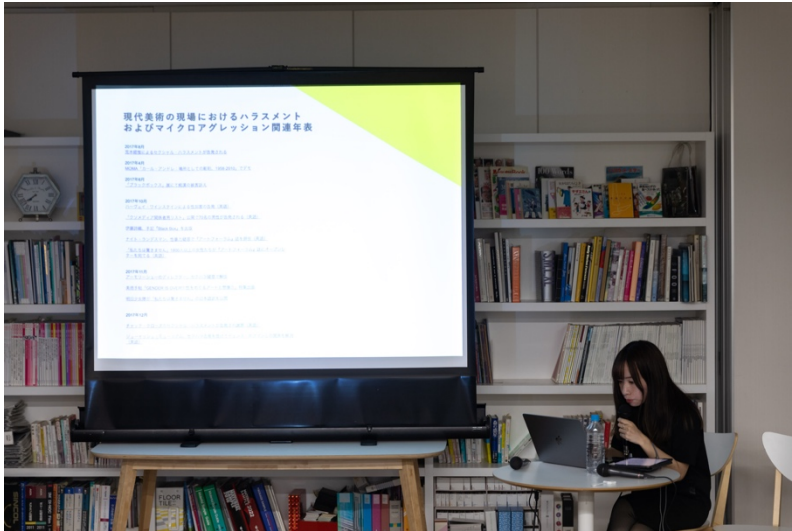
ファールストレームの芸術実践を論じるにあたり、関氏は「政治的アーティスト」としてより知名度の高いハンス・ハーケを比較対象に据えた。制度批判として評価されるハーケの作品があくまで制度内でなされた制度批判であり、自らが依拠する表象システムそれ自体に批判を向けることはないという見解を示し、関氏はファールストレームの作品に別種のポテンシャルを見出そうとする。関氏の見方では、そのポテンシャルは制度を内破し、既存のものとは異なる世界のモデルへと内側から再構築するー「世界を操作する」ーファールストレームの芸術的手法に由来する。



高橋沙也葉氏は、1960年代の彫刻作品を主な調査対象として、とりわけ抽象彫刻の政治性という観点から、日本とアメリカのアートシーンの交わりに光を当てる研究を行っている。自身の研究にも関連して、高橋氏はジュリア・ブライアン＝ウィルソンの『アートワーカーズ—制作と労働をめぐる芸術家たちの社会実践』（邦訳はフィルムアート社より2024年に刊行）の翻訳プロジェクトでは代表も務めた。



「(批評) 行為と (批評) 行為者」というストレートなタイトルの選択は、「批評」という行為を行う自らの、そして個々の批評家たちの当事者性に対する高橋氏の（それこそ「批評的な」）意識をよく表す。自身の研究領域である1960年代の彫刻作品をめぐる語りがいかに性差別やジェンダーバイアスを内包していたかを切り口に、現代アートの世界におけるハラスメントやマイクロアグレッションの問題について議論を展開した。高橋氏は、暴力や差別を内包する現場で作られた美術作品および批評を受容するにあたり、作り手や書き手の倫理的態度を作品の美的な性質や鑑賞者に与える影響と切り離すことなく関連付けながら読み解くような「再読」の事例を高く評価し、こうした姿勢によって新たに生まれつつある作品の語りにこそ、真に批評的な可能性を見出しようと主張した。



その後約1時間に及ぶディスカッションでは、高橋氏から大岩氏と関氏への問いかけを起点に、「モダニズム美術批評において自明視されてきた行為主体（の拡張可能性）」や「制度批判的な芸術実践における既存の制度との距離（とそれがもたらすポテンシャルとリスク）」といったトピックについて、多角的かつ批判的な討議が展開された。

